

---

# 立ち上がる意思 ルーフェイア・シリーズ07

こっこ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

立ち上がる意思 ルーフエイア・シリーズ07

### 【Nコード】

N6152E

### 【作者名】

こっこ

### 【あらすじ】

穏やかな浜辺に写しだされる、過去、力、そして意思。心優しい美少女が繰り広げる、異色の学園バトルファンタジー シリーズの第7作です。少しだけ、全編通しての「謎」が出てきます 反王道、「無情」という名の条理がある」とまで言われた、ひたすらピタリな世界をどうぞ 携帯版は1行毎の改行or空行です

## Episode : 01 浜辺

R u f f e i r

「海だ」

ミルがやけに嬉しそうな声で、浜辺へと駆け出した。

別に今日じゃなかったって、海はなくならないと思うけど。

でも確かに、入れるという意味じゃ、特別かもしれない。

あたしはよく知らなかったけど、海っていうのはいつでも入れるものじゃないらしい。一年のうち期間を区切って、その間だけ、泳いでいいって決まってるんだそうだ。

ただなぜわざわざ、そんな面倒なことをするのは、よく分からなかった。

しかも面白いことに、その解禁日　つまり今日　は、シエラの生徒が全員で海へ入ることになってる。

ちなみに理由をイマドに聞いてみたら、どうもケンディクの街側が「せっかくの解禁日なのに誰もいないのは寂しい」と言って、以来こういうことになったらしい。

世間って、けっこうヒマかも。

ともかくそんなわけで、学院の全生徒で浜辺はあふれてた。ただこの海岸はかなり広いから、それなりにゆったりした感じだ。

「やっぱりいいよね」

「ほんと、夏が来たって感じ」

ナティエスとミルが、おおはしゃぎだ。シーモアもけっこう、嬉しそうにしてる。三人ともわざわざ水着を新調してるんだから、よっぽど楽しみだったんだろう。

「ほら、ルーフェもおいでよ?」

みんなに呼ばれて、あたしも浜辺に足跡を残した。

なんだか、足がさらわれそうだ。波が引いていく感触が、気持ち悪い。

「どしたの? なんで入らないの?」

「あたし……海は、あんまり……」

うまく答えられない。何より、言いたくない。

「どうして?」

よっぽど不思議らしくて、みんなが一斉にこっちを見る。

やっぱり言わないと収まりそうになくて、仕方なしに、あたしは口を開いた。

「だって、あたし……泳げない……」

「ええ……っ!」

みんなの驚きの声が、きれいに揃う。

「ホントなの?」

聞かれて、慌てて言いわけした。

「あ、えっと、ぜんぜん……泳げないとかじゃ、ないの。でも、

あんまり……上手くない……」

言ってるうちに、だんだん自分が情けなくなってくる。

「信じらんない。ルーフェってなんでも出来るから、泳ぎも得意だ  
と思ってた」

「うんうん」

なんかあたしが泳げないの、いけないことみたいだ。

「でも、だから……泳ぎとか、習うヒマ、なくて……」

「あー、そっかあ」

あたしの説明に、みんなが納得する。

「たしかに前線じゃ、悠長に泳いでるワケにや、いかないだろうしねえ」

「けどさ、やっぱリルフエって、習わなくても泳げそうなんだけどな」

「言えてる」

あたし別に、そんな何でも出来るわけじゃないのに……。

なんだか落ち込んであかし、ちよつとため息をついた。

## Episode : 02

I m a d

「やゝともどつてきたか」

海からあがった俺に、悪友たちが声をかけてきた。

「わりい。久しぶりだから、ちと夢中になってた」

「いいっていいって」

こいつらもいい加減、夏の俺の行動パターンは飲み込んでるっぽい。

「ホントお前、泳ぎは上手いよな」

「まあな」

つか俺、泳ぐのだけは自信ある。今年も一夏泳ぎ込んで、タイム上げるつもりだった。

よく晴れただけあって、日差しがキツイ。突き刺さる感じた。

でも去年はこの日、エラく寒くてみんなでひどい目に遭ったから、それを思えばかなりマシだろう。あの時俺は平気だったけど、クラスはほぼ全滅したし。

どっちにしても明日からは、思う存分泳げるってやつだ。その意味じゃ今日は、俺が一年でいちばん楽しみにしてる日だった。

ルーフェイアのヤツは、海開きの意味が分からなかったらしくて、ひたすら怪訝そうな顔をしてたけど。

あいつに言わせると「そこにあるのに、どうして自由に泳げないのか」ってことらしい。

「おい、飲むか？ こつち来いよ」

「あ、いま行く」

あいつら、いつの間にか日陰を陣取ってやがる。俺も連中の隣へ

行って、腰を下ろした。

「しっかしよかったよね、晴れて。去年はヒサンだったじゃねえか」

「っていうか、あれで海に入ってた方がムチャだよ」

「お前ら見てねえだろうけど、去年のムアカ先生、すごかったぞ。怒りまくってたかな」

「あー、なんかわかる」

「ついこの話になるのはしょうがない。去年はともかくヒドかった。んでその分、今年はみんな、浮かれまくってる。」

「そいえばこの話、ルーフェイアのヤツ知らねえな。」

「あいつは今日は、シーモアたちといっしょなはずだ。」

「おい、イマドー？」

「ん？」

「アーマルに呼ばれて、はっとわれに戻る。」

「また、ぼーっとしてさ。ルーちゃんのことだろ」

「イマド、保護者だもんな」

「よく分かってんじゃねえか」

「この一言で、2人が黙った。」

「けっこうこいつら、わかりやすいよな。」

「まあどっちにしてもルーフェイアのヤツは、バトル以外は信じらんねえほど常識で、あぶなっかしいことこの上なしだ。見てねえと何すっか分かんねえ雰囲気がある。」

「と、当のルーフェイアを見つけた。」

「なんかいつものメンバーに囲まれてっけど、どういうわけか下向いて、なんかヤバげな雰囲気だ。」





## Episode : 03

「わりい、ちよつと行ってくるわ」

「いや待て、ルーちゃんのことなら僕も行くから」  
「なんかなし崩しに、こいつらもついてくる。」

近づくとすぐ気配に気づいて、ルーフェイアのヤツが振り向いた。

「お前ら、なにやってんだ？」

「あー、イマド？ それがさ、ルーフェったら海、ヤなんだって」

「え？ なんでだ？」

けど、こいつの足元を見て気づく。まさかつては思っけど……。

「それがさ、ルーフェイア、泳げないって」

「あー、やつばそうか。いまコイツの足元見て思った」

ルーフェイアのヤツは、みんなに知られなくなかったんだろう。  
バツの悪そうな、泣き出しそうな顔だ。

けどホントのこと言うと、俺も信じらんなかった。バトルとなれば上級生顔負けのくせに、泳げねえってのは意外すぎる。

「あたし……海軍じゃなかったし……」

「いやそれカンケーねーだろ」

「いやあ、でもいいんじゃないか？ ルーちゃんに意外な弱点！  
いいなあ、うん」

ヴィオレイのヤツ、ぜんっぜんフォローになってねえし。

「あのさ、ルーフェよけい落ち込んでない？」

「わわ、ルーちゃんゴメン！」

突っ込まれて、ヴィオレイが慌てて謝る。

でもよく考えてみりゃ、ありうる話だった。ルーフェイアのヤツ

は戦場育ちだ。のんびり泳ぎを習う暇なんて、ありやしなかったんだろう。

当人はみんなにいろいろ言われて、かなり落ちこんでるっぽい。このまま放つとくとたぶん、また泣くだろう。

こいつの泣き虫は筋金入りだ。一回泣き出したら、しばらくは泣きやまねえし。

「おまえ、水には浮けんのか？」

とりあえず助け舟、出してみる。

「そのくらいだったら……」

どうにか間に合ったみたいでルーフェイアのヤツ、泣かねえうちに顔を上げた。

「そしたら、俺が教えてやるよ。シーモア、俺ら置いてっていいぜ？」

「わかった、すまないね」

「そしたらあとでね」

シーモア、ナティエス、ミルの3人が、きやあきやあ騒ぎながら海へ入っていった。

「なんか……ごめん」

「ルーちゃん、気にしなくていいから！ 僕たちも教えてあげるよ」  
行く気満々のヴィオレイの頭を、アーマルのヤツがぶん殴る。

## Episode : 04

「オマエさ、ちょっとは氣利かせろよ。オレら呼びじゃないって」  
「え?? そんなわけないじゃないか! ね、ルーちゃん」

「あ、うん……」

断るっつーこと知らねえルーフェア、圧されてうなずいてるし。

「いいからオマエ、こっち来いっ! イマドはどーでもいいけど、  
ルーフェアがカワイソウだろ」

アーマルのヤツが、ヴィオレイの首絞めながら引きずってく。

なんかビミョーに、腹立つ言い方しやがったけど。

ルーフェアのヤツが、ほっとした表情になった。やっぱ泳げねえところは、見られなくなかったらしい。

「二人に、謝らなきゃ……」

「気にすんなって。あいつら、いつもあんなだかな」

「そう、なんだ」

こいつといつしよに歩き出す。

「向こうで教えてやるよ。あっちなら人も少なえし。ただ、ちつと歩かんかな」

「うん」

この海岸は、ケンディクきつてのリゾート地で有名だ。延々とキロ単位で砂浜が続いて、ホテルもかなりの数が建ってる。だから浜辺もかなり整備されてて、ところどころに栈橋なんかもあった。

その一つへ向かう。割と浜辺の端のほうにあって、この向こう側はほとんど人は行かぬ場所だ。

ルーフェアも、とことこついてきた。

「少しは、泳げるの。でも……習ったこと、ないし……」  
「わかってるって」

よっぽど気にしてんだろっ、一生懸命言い訳するあたりが、けっこう可愛い。ナティエスかミルが選んだらしい、白のワンピースの水着がよく似合ってた。

これでもう少し体型が……。

「なに？ あたしなにか……変？」

「いや、おまえってマジで、幼児体型だよな」

「！！」

ヤバいと思ったときにゃ、すでに鳩尾に蹴りを食らったあとだった。

すっげー強烈。

胸（腹？）をおさえたまま、立てなくなる。これで恐らく手加減してんだから、むちゃくちゃってしか言いようがない。

けどこの手の話だと、なんでかルーフェイアは、口ほどには傷つかなかった。ケリが出るのがいい証拠だ。もし本当に傷つけば、蹴るより先にこいつは泣き出す。

「先に、行く！」

けっこつ怒ってるらしくて、ルーフェイアのヤツは俺置いて、さっさと歩き出した。

## Episode : 05

R u f e i r

結局泳げないあたし、シーモアたちと別行動することになった。

ほんとはいっしょに、行ってみたかったけど。

でもみんな泳ぎが上手みたいだから、あたしが一緒じゃ楽しめないだろう。

ただ、イマドが教えてくれると言っててくれた。さすがに一人じや寂しいかな、と思ってたから、ちよつと嬉しい。

「少しは、泳げるの。でも、習ったこと、ないし……」

なんとなく自分が泳げないのがいけないような気がして、いろいろ言い訳してみる。

でもいつものようにイマド、あたしを責めたりしなかった。

「わかってるって」

ほつと心が軽くなる。

少し歩調を上げて、イマドの隣に並んだ。彼とは頭ひとつ違うから、急ぎ足にならないと並んで歩けない。

けどこの水着、いまいち馴染まないな。

水着なんて着たことないし、これ自体も新しいおろしたてだから、どこか着心地がよくない。戦闘服のほうがよっぽどまだ。

と、イマドがあたしを見ているのに気づく。

「なに？ あたしなにか……変？」

こんな格好したの初めてだから、すごく気になる。

でも、イマドの答えはぜんぜん違うものだった。

「いや、おまえってマジで、幼児体型だよな」  
「！」

思わず体が動いて、鳩尾に蹴りを叩きこむ。

イマドがその場にしゃがみこんで動けなくなったけど、無視した。どうせ手加減しておいたから、そのうち回復するはずだ。

「先に、行く！」

さすがに腹が立ったから、イマドを置いて歩き出す。  
気にしてるのに！

どうもあたし、昔から小柄だ。それになかなか身長も伸びない。もちろん戦闘なんかじゃすぐ不利で、スピードと従属精霊とでそれをようやく補ってる。

力に至っては、底上げしててもかなり厳しい。体質のおかげで精霊との相性が良くなかったら、とうの昔に戦場で死んでるだろう。

まあ最近は、そういう心配もないけど……。

そして、背筋が寒くなった。人間は、こんなに簡単に慣れてしま  
うのかと。

今まで生きてきた殆どをすごしたはずの戦場が、とても遠いところ  
に思える。

夢は叶った。

友達も出来た。

けど、これでいいんだろうか……。

あたしが手にかけてきた人たちを、裏切ってる気がする。

そのあたりへ腰をおろして、ふと、足もとの貝殻を拾った。

綺麗だけれど、命のないただの抜け殻。

あたしの知ってる人もこうして抜け殻になって、二度と帰ってこなかった。

会いたい。

優しくかったあの人たちに……。

## Episode : 06

「お久しぶりですね」

「 たっ、タシユア先輩！」

振り向くと真後ろに、先輩が立っていた。

銀髪と紅い瞳。金髪に碧い瞳のあたしとは、不思議なくらいに正反対の容姿だ。

上着を羽織ってるけど、その下はちゃんと水着だ。でも、眼鏡はかけたままだった。

この先輩を見ながら思う。やっぱり勝てないと。

なにしろこの先輩が片手で軽々と扱うあの両手剣　ラスニールというんだそう　は、あたしじゃ両手で持ち上げるのがやっとだ。何よりあたし、先輩の胸あたりまでしか身長がない。体重なんかは倍くらい違うだろう。

羨ましかった。

たとえ大人になっても、女のあたしはきっと勝てないに違いない。でもあたしは、この先輩が好きだった。細かくは知らないけれど、同じように戦場で育ったということに親近感を覚える。

それに、この先輩は強い。

こんな風に生きられたらいいだろうな、そう思って先輩の方を見る。

「何か、聞いてほしいことでもあるのですか？」

たぶんあたしの視線を違う意味に取ったみたいで、静かな声で先輩がそう言った。こういうことを言う人じゃないと思ってたから、



ちょっと意外だ。

もしかすると、今日は授業がないから、機嫌がいいのかもしれない。

「なんでも……ないんです。ただ、平和慣れが……情けなくて」

なんとなくため息がでる。

そして、ふと思いついた。前からひとつだけ、知りたいことがある。

「あの……先輩、えっと、あの……」

「はつきり言ったらどうです。それでは何が言いたいのか、まったく分かりませんよ」

「あ、すみません……」

やっぱり怒られる。

でも今日はどういうわけか、それだけだった。だからちょっと勇氣付けられて、続けてみる。

「えっと、だから、訊きたいことが……」

どうにかそれだけ言えた。

「なにを聞きたいのかは知りませんが 面白い話はできませんよ」

「あ、ええと、そういう話じゃなくて……」

今度は怒られずに済んだけど、上手く説明ができなくなってしまった。

でも今日は先輩、いつもより機嫌がいいみたいだった。

「まあ、答えられる範囲でなら、いいでしょう」

それでもなんだか言い出せなくて、しばらくためらってからやっと、あたしは聞きたかったことを口にする。

「先輩のいたヴァサーナって、どんなところなんですか？」

この間送られてきた手紙に、そう先輩の出身地が書いてあったのだ。

## Episode : 07

ヴァサーナは東の大陸にある国で、こちら側の世界とはあまり付き合いがない。魔獣や海竜の棲む大洋が、行き来を阻んでるからだ。ただシユマー家経由で入ってくる情報だと、独自の文化と、高い科学力を持つてゐるらしい。

だから昔から、とても興味があった。

けどこの質問で、なんとなく先輩の表情が変わった気がした。聞いちゃいけないことを、聞いてしまったのかもしれない。

「あの、すみません。えっと、いいです……」  
慌ててそう言う。

でもタシユア先輩の答えは、ちよつと思つてたのとは違った。

「構いませんよ。聞いていいといったのは、こちらですからね。

ヴァサーナですか。荒野に無理矢理人間の居場所を造った、居心地の悪いところです」

「そう、なんですか……？」

ぜんぜん想像していなかった答えに驚く。もつと素敵なところだと、想像してたのに。

「もつとも私も、すべてを知っているわけではありませんがね。ずっと研究所にいて、あとはそのまま戦場行きでしたから」

「じゃあ、やつぱりその傷痕……？」

さつきからずっと気になつてた。

上着を羽織つてはいるけれど、時々その陰から見え隠れしている。それもひとつふたつじゃない。中には死にかけたに違いないもの。胸の傷は間違いなくそうだ。　　まで、信じたくない数　　だった。

「そういうことです」

「そんな、ヒドい……」

涙がこぼれそうになる。

あたしも何度が大怪我をしてるから分かる。これだけの傷を負いながら生き延びることが、どれだけ難しいかが。

しかもずっと研究所に押し込められていて、そのあとはこんなひどい怪我をする場所に放り出されたなんて。

胸の傷が疼いた。

あたしにとつてはいちばん大きかった怪我だ。

もっとも見た目には、何もない。あたしの場合ごく小さなもので含めて傷痕はすべて、シユマーの医療技術を結集して消されてる。それでも痛かった。

どうしてあたしたち、こんな目に遭ってるんだろう？

涙があふれて、止まらなくなる。

そんなあたしを見て、タシユア先輩が冷ややかに言った。

「同情ですか？ そんなものは欲しくありませんね」

「ちがいます！」

自分でもびっくりするくらい、強い口調だった。

## Episode : 08

「そんな、同情なんて……。そうじゃなくて……。あたしたち、どうして……」

言葉が続かない。

ただただ、悲しかった。

どうしてあたしたち、普通に育っちゃいけなかったんだろう？  
それを望むのって、そんなにいけないんだろうか？

でも先輩は、静かな声のまま言った。

「昔のことです。忘れるとは言いませんが、気にしすぎると前に進めませんよ」

「あ、はい」

急いで涙をふく。

そうだ。泣いてたってどうにもならない。

「おや、迎えが来たようですね」

「え？」

言われて先輩の視線をたどると、さっきの蹴りからやっと回復したみたいで、イマドがこっちへ歩いてくるところだった。

そつと手を振ってみると、すぐ気が付いてこっちへ走り出す。それを見て思った。イマドってやっぱり、「真っ直ぐ」な感じがする。

「つたく、もうちつと手加減しろよな。」

「って、また泣かされたのか？」

先輩が間髪入れずに言い返す。

「人聞きの悪いことを言わないで下さい。私は何もしていませんよ」

イマドが「ホントか？」って顔で、あたしを見た。

彼の視線にうなずいて返す。

「あたしが、勝手に……泣いたの」

「お前がそう言うなら、そうなんだろう」

あっさりイマドはあたしの言うことを信じる。そして先輩の方に  
向き直った。

「すみません先輩、こいつが迷惑かけたみたいで」

なんだかいきなり、ヒドいことを言われる。

「おやおや、まるで保護者ですね。」

「あー、それ、こいつのお袋に頼まれてんで」

まだ。

誰がどう見ても変わってるってしか言いようがない母さん、その  
割にかなり世話焼きで過保護だ。あたしの知らないところでさつさと  
話を通してたりと、根回しされてることはしょっちゅうだった。  
恥ずかしいからやめてって言うてるのに、気にもしてくれないし。

「つか、こいつ野放しとか、けっこう怖いですよ？」

「それは否定できませんね。」

まあ不要な傷を作らないように、彼女の背中を守ってあげるの  
で  
すね」

先輩まで……。

みんなから思いつきり、好き勝手言われてる気がする。

でもこういうのって、あったかいかも。

また、涙がこぼれた。

## Episode : 09

I m a d

ルーフェイアのめっちゃめっちゃ強烈な膝蹴りから回復するのに、けっこうかかった。

なんせ手加減してるって、きっちり急所に決められちゃ、キツいなんてもんじゃない。

まあこれに関しちゃ、口滑らせた俺が悪いんだけど……でもあいつ、体型ガキなのは事実なわけで。

とりあえずどこへ行ったかと思って、歩きながらあたりを見まわしてみる。

あ、いた。

向こうも気が付いて、少し手を振る。

それにしたってなにがどうしたんだか、「あの」タシユア先輩といつしよだ。

俺にとつちや信じらんねえ話だけど、海に落ちた一件以来ルーフェイアは、あの先輩になついてる。タシユア先輩をつかまえて「いい人」って言うのは、おそらくあいつだけだろう。

しかもよく毒舌食らって泣かされてるってのに、性懲りもなくついてくんだからたいしたもんだ。

なんでそうなったのかこないだ聞いてみたら、診療所で寝てた時に、「お見舞いに来てくれた」ってことらしい。

話の内容総合するとシルファ先輩のほうはともかく、タシユア先輩はお見舞いつてのにはなんか程遠い気はすつけど、当人はともかくそういう判断だ。

で、ともかくルーフェイアはとことん甘いやつだから、それであ

っさり「いい人」に評価変えたらしい。

バトルとなったら容赦がないけど、それ以外はあいつ、あきれるくらいに優しいっつーかお人好しだ。

ま、それがいいとこなんだけど。

それにバトル自体もぜんぜん好きじゃなくて、否応なしに身体が動くだけって、本人は言ってるわけで。

もしシュマーなんてワケわかんない家に生まれなかったら、普通にガッコ行ってダチと仲良くして、それで終わりだったろうに。

でも今はとりあえず、先輩に泣かされないうちに引き取るのが先だろう。

「ったく、もうちつと手加減しろよな。

って、また泣かされたのか？」

近づいてみたら、また涙のあとがついてやがる。

「人聞きの悪いことを言わないで下さい。私が泣かしたわけではありませんよ」

どうにもこの先輩の言うこのセリフは信用ねーから、ルーフェイアのほうを見ると、こいつもこっくりうなずいた。

「あたしが、勝手に……泣いたの」

「お前がそう言うなら、そうなんだろうな」

俺も甘いな、と思う。毎度こいつの言うこと、鵜呑みにしてんだから。

そんなこと思いながら、とりあえず先輩の方に向き直った。

「すみません先輩、こいつが迷惑かけたみたいで」

「おやおや、まるで保護者ですね」

「あー、それ、こいつのお袋に頼まれてんで」





## Episode:10

ルーフエイアのお袋さん、実はかなり過保護だ。最初的时候はもちろん、ルーフエイアのヤツが学院来ても、俺のほうになんやかや話回してくる。他にも、学院長辺りにもいろいろ言ってるらしいし。

ただ当のルーフエイアには分かんねえようにするのが、ちょっと面白いとこだった。

それに俺からしても、常識がいろいろヤバイルーフエイアは、かなり見てて危なっかしい。

「つか、こいつ野放しとか、けっこう怖いですよ?」

「それは否定できませんね。」

まあ不要な傷を作らないように、彼女の背中を守ってあげるのですね」

先輩はそう言うけど、こいつの背中取れるヤツって、言ってる当人だけじゃねえのかな、と思う。

たしか傭兵やってる親もとれないとかなんとか、俺、聞いた気がするし。

って、ルーフエイアのやつが泣いてるし。

「こんどは何だ?」

「あ、ごめん……。平気、もう、泣かない……」

「ムリすんな。しばらく泣いてる」

なんかよく分かんねえけど、何かに感動して泣いてるっぽいから、そのままにする。

と、今度はいきなり、嬌声ともいえる声が響いた。

「あゝ、ルーフエイアいたいた!」

シーモアたちだ。

「やっぱり、いっしょに泳ごうと思ってさ」

「さっきはごめんね？　って、泣いたりして、どしたの？」

「あ、タシユア先輩こんにちは」

「こんにちは、ミルドレッド＝セルシェ＝マクファディ」

「タシユア先輩に泣かされたのかい？」

「うそぉ……よく、ミルのフルネーム……」

「やゝ、先輩ってすごおい」

一気に周囲が騒々しくなる。

「さっきは悪かったよ、置いてったりしてさ。さ、もう泣くのは止めなよ」

「あ、ちがうの。そうじゃなくて……」

「ルーフェイア、泣いてもカワイイ」

「みななどお昼食べて、いっしょに泳ごう？」

それにしても女子ってのは、よく喋るな……。

「では迎えも来たようですし、私はこれで失礼します」

「えゝ、いっちゃうんですかあ？　いっしょにお昼食べましょうよ」

おい、ミル……。普通この状況で、タシユア先輩誘うか？

「遠慮しておきます。」

あまりうかれますと、砂魚に思わぬ怪我を負わされますよ」

「あ、はい　先輩今度、みなでどこか行きましょゝね」

「もお、ミルってばやめなよ……」

もともとなんの話だったのか、わかんなくなってきた。

先輩も呆れ顔で、でも上手く逃げてってるし。



## Episode : 11

ともかくまだやいのやいの騒いでる女子連中に、声をかける。

「おい、こいつ引き渡していいのか？」

「引き渡すつて、ひどい……」

「ああ、かまわないよ。とりあえずお昼にしようと思ってるしね」  
そう言えばもう、そんな時間かと思う。

「あ、そ〜だ！ いいこと思いついた！！」

この一言に、自分でも血の気が引くのが分かった。ミルの「いいこと」つてのは、マジでロクなことがない。

「お・ひ・る・ちょ〜だい イマドどうせ、なんか作ってきたんでしょ」

「冗談じゃねえ！ お前の分なんか作つてねえつての！！」  
けど思えばこれが、最大の墓穴だった。

「イマドつて……料理するんだ？」

いつもみてえに少し首をかしげて、ルーフェイアが誰にともなく言う。

「あれ、ルーフェイアつてば知らなかったの？」

「ナティエス、言うんじゃねえ」

思いつきり嬉しそうなナティエスのヤツ、止めたけど聞きやしなかった。

「いいじゃない、教えてあげるくらい。」

ルーフェアのね、イマドつてば、料理けっこう上手なの

答えを聞いたルーフェイアが、目を丸くする。

「ほんとに……？」

「うん。てか、ウソついたってしょうがないもの」

なんとなく、次のセリフは予想がついた。

「あたしも、食べたい、かな」

「はい、決まり」

あんな調子だけど、ミルのヤツは意外に鋭い。俺が断れないのを  
読んで、勝鬨の声を上げる。

なんでこうなるんだよ。

ルーフェイアだけならまだともかく、こいつら女子ときたらウル  
サイわよく食うわ、たまったもんじゃねえってのに。けどこいつら、  
食う気満々だ。

そんな俺の肩を、シーモアが叩いた。

「イマド、あたしもナティと作ってきたからさ」

「……すまねえ」

まだ昼も過ぎないってのに、思いっきり疲れながら、俺は諦め半  
分で礼を言った。

## Episode : 12

R u f e i r

イマドが料理するなんて、知らなかった。

ちよつと尊敬。

あたしつてそういうのは、ぜんぜん駄目だ。

ちなみになにがどうなったのか、お昼はあたしたちとイマドの友達と、なんか七人もの大所帯になつてゐる。

しかもなんと云うか、生存競争が激しい。

「お前ら、ちつと遠慮しろつての！ おいルーフェイア、しっかり確保しねえと、食うもなくなるぞ！」

「あ、うん」

でも毎日の昼休みの食堂での騒ぎといい、この今の凄さといいシエラってなんか違うところで、バトル厳しいような？

「ほら、これおいしいよ」

まるで自分が作ったみたいない調子で、ミルがあたしに勧めた。イマドの作ったサンドイッチつて、凝つてゐる。

「これ……なにがはさんであるの？」

お肉と野菜　だとは思ふんだけど。

「なにつて、葉菜とメナナとロースト肉、でしょ？」

「ロースト？」

でもナティエス、このお肉……ローストつて云うのに、中が生みたいだし……」

戦場あたりじゃ生は食べないのは、鉄則と言ってもいい。

「ほんとに食べても、大丈夫？」

あれ？

言ったとたん、なんかみんなが石化した。

「ねえ……みんな、どうしたの？」

「どうしたもこうしたも、お前普段、なに食ってるんだよ……」  
なんかイマドも、すごくシヨック受けてるみたいだ。

「なにって、食べられるものなら、なんでも……。好き嫌い、ないし」

「意味が違っ！」

こんどはミルが叫んだ。

あたし、そんなに変なこと言っただろうか？

「と、ともかくさ、残りさつさと食べて、泳ぎに行かないかい？」  
シーモアもずいぶん焦っているみたいだし、他のみんなも同意して、慌てて昼食の残りを片付け始める。

けどそんなに慌てたら、消化に悪いんじゃないだろうか？  
ともかくおかげで、あっさりぜんぶなくなった。

「あたしが後片付けしとくよ。みんな先に行つてな」  
面倒見のいいシーモアがそう言ってくれたから、みんなで甘えることにする。

あいかわらず波打ち際は、寄せては返す波が洗っていた。  
透き通った波に足が洗われると、踏みしめたはずの砂が流されていく。

それがやっぱり嫌で、なるべく波の来ないところを歩いた。



## Episode : 13

「あ、船」

「ほんとだ」

ミルとナティエスが、歓声を上げた。  
つられて沖を見る。

突き刺さる陽射しの下、あたし改めて海を見た。  
瞳に飛びこんでくる碧。

広い。

それに海って、こんなに綺麗だったのだろうか？

遥かな碧さ。

煌く光。

遠い彼方で空と混じって、そこで青が変わる。  
立ち昇った雲が、目に痛いほど白い。

そうだ、あたしずっと憧れてた。

海の色はあたしの瞳と同じだと、ずっと聞かされていたけど。

ほんとうだったんだ。

思い切って、一步海の中へ入ってみる。

冷たい感覚。

波が流れていく。

無限の回数続く、潮騒の音。

きつとあたしが産まれる前……ううん、シュマーという家が生まれるずっと以前から、同じ音だったんだろう。

この碧い海に訊いたらきつと、人が忘れてしまった昔も分かる

のかな。

その時、ふわりとあたしの視界を、影がよぎった。

驚いてその影を追いかける。

視線が行きついた先には、投げられたタオルを鮮やかに受け取った、女子の先輩がいた。

まとめあげた艶やかな長い黒髪、紫水晶を思わせる瞳　この間お世話になった、シルファ先輩だ。

背が高い上にスタイルがいいから、黒のシンプルな水着がよく似合ってる。

シルファ先輩、タオルを羽織るようにしながら海から上がってきて、向こうへと歩いていく。そして投げた人　もちろんタシユア先輩　と、話し始めた。

「なに見てるの？」

不思議に思ったらしくて、ナティエスが訊いてくる。

「うん、ほら」

「あ、シルファ先輩じゃない。やっぱり素敵だなあ……」

「あの先輩さあ、いつ見てもカッコいいよね　スタイルもすっ

ごいいいし」

ミルも隣へ来てはしゃぎ始めた。

「しかもさ、いつも美男美女で並んでるんだもん。もおサイコー！」

「いつも？」

仲が良さそうなのは知ってたけど、そんなにだとは思わなかった。

「あれルーフェ知らないの？　シルファ先輩、タシユア先輩のカノジョだよ」

「有名だよ、その話」

二人が言うところを見ると、学院内じゃよく知られてるみたいだ。



## Episode : 14

「ケーキ、だけじゃないんだ」

「ケーキ？」

ナティエスがなんのことか分からない、という顔をした。

そういえば例の話、イマドとロア先輩しか知らないんだっけ。  
ナティエスたちには、なんだかタイミングを逃して、けっきょく  
言ってなかったはずだ。

「えつとね、その……前に診療所で寝てたとき、あの先輩がケーキ  
……持ってきてくれて」

「うそお、いいなあ！」

「それ、羨ましすぎかも」

二人が声を上げる。よく分からないけど「シルファ先輩のケーキ」  
は、特別なものみたいだった。

でも確かに、なにが入っていたのかはいまだに分からないけれど、  
とてもおいしかったのは事実だ。

「あたし……ちょっと、行ってくる」

「なにに、ルーフェイアったらシルファ先輩のどこ行くの？ ん  
じゃあたしも」

「あ、抜け駆けとかずるい。あたしも行く」

結局3人で行くハメになった。

あ。

少し近づいてみたらタシユア先輩、感じがいつもとぜんぜん違う。  
なんと言ったらいいんだろう……そう、すごく穏やかな感じ。  
シルファ先輩がタシユア先輩にとってどういう人か、やっと分か

ってなぜか嬉しくなって、もつとそばまで行く。

「まだ何か？」

あたしたちが行くと、タシユア先輩が少し呆れたような声をだした。

「えつとお、ルーフェイアが用なんです」

第一声を発したのはミル。あたしが何か言う間もなかった。

それにしてもミルの神経、極太のザイルでもできてるんだろうか？ この先輩相手に平気な顔だ。

そして彼女、今度はシルファ先輩に向き直って一言。

「 89、59、88？」

聞いた先輩たちが、怪訝な表情をする。

「ねえ、ミル。その数字……なに？」

あたしは意味がわからなくて、ミルに訊いてみた。

「あれ、ルーフェ知らないの？ えつとねえ、だから上からのなの」

「上から？」

「もおルーフェイアってば！ だからムネがあ……ふみゆっ？！」

そこまでミルが言いかけたところで、ナティエスが強引に彼女の口をふさぐ。

「ミル！ いくら先輩がスタイルいいからって、いきなり何言ってるのよ！」

ルーフェイアも訊くんじやないの！

「え？ そうなの？」

結局なんのことは、分からずじまいだ。

あとで、イマドにでも訊いてみよう。



## Episode : 15

タシユア先輩があたしたちに、冷やかな視線を向ける。

「そんなくだらないことを、わざわざ言いに来たのですか？」

「すみません……」

謝るあたしに、シルファ先輩が声をかけてくれた。

「もう、いいのか？」

「あ、はい」

言葉はそうでもないけど、優しい声だ。

「そうか。心配してたんだが……元気そうで、良かった」

「はい！」

先輩にそう言われて、なんだか嬉しくなる。

「えっと、あの、ケーキ……おいしかった、です」

あたしがそう言うと、シルファ先輩の顔が少しほころんだ。

「ねえ、どんなケーキだったの？」

ナティエスがそつと訊いてくる。

「えっと……？」

あの時は食べただけで名前は聞かなかったし、そもそも何が入っているのか、いまいち分らない。

「もう。ルーフェイアってばホントそういうの、覚えてないんだから」

「ごめん……」

やり取りがおかしかったみたいで、シルファ先輩が笑いながら、助け舟を出してくれた。

「オレンジのケーキだ。間に、ムースも挟んだ」

「わ、いいなあ〜！ シルフア先輩、こんどあたしにもください  
〜！！」

ミルが騒ぐ。

「ミ、ミル、ちょっと……」

「なんでルーフェ、止めるの？」

ねえ先輩、ミルは先輩の手作りケーキ、食べたいですう〜！！」  
あたしじゃミルの勢いは、止めようがなかった。

「 わかった」

「 やった〜」

困惑しながらも承諾したシルフア先輩の答えが、ミルはよほど嬉  
しかったらしい。手を叩きながらそこら辺を飛び跳ねている。

「シルフア先輩、あの、すみません。すぐ彼女……連れていきます  
から」

「あ、ルーフェイアってばヒドおい！ 泳ぎ教えてあげないから！」

あ、やだ！

この毒舌の先輩に泳げないなんて知れたら、また何か言われるに  
決まってる。

でもタシユア先輩が口を開くより早く、シルフア先輩が考えるよ  
うにしなから言った。

「泳げないのか？ なんなら、教えてもいいが……」

びっくりして先輩を見ると、優しい笑顔だった。



## Episode:16

「あの、ほんとに……いいんですか？」

シルファ先輩に教えてもらえるなら、言うことなんてない。だいたいミルじゃ恐ろしすぎる。

「まあ……私もそれほど、上手いわけじゃないんだが」

「いえ、そんなこと！ あの、よろしくお願いします」  
けどあたし、まだ甘かった。

「あ、いいなあ！ ルーフエアってば、ひとりでするうい、あたしも……！」

ミルの嬌声が響く。

「ちよつとミル、そんなこと言ったら迷惑だよ……」

とつさにナティエスがなだめに入ってくれたけど、その程度でミルが止めるわけがない。

「あ、ええと……それならみんな、来るといい」  
「やったあ！」

結局、押しの強いミルの勝ちになった。

「……先輩、ほんとにすみません……」  
ひたすら謝る。

「いや……気にするな」

「すみません……」

「ほんとうに、気にしないでいいから……」

いけない。このままじゃ同じセリフの堂々巡りだ。

「えっと、あの、そしたら……よろしく、お願いします」  
「ああ、わかった」

どうにか無限ループを抜け出して、海のほうへとみんなで歩き始める。

タシユア先輩はシルファ先輩にちよつとうなずいて見せただけで、こつちへはこなかった。やっぱりミルと一緒に嫌なんだろう。

「じゃあ、ちよつといってくる」

「いつてらっしゃい」

シルファ先輩に、そう返したただけだ。

それにしても、意外だった。

何も言わないなんて。

なんだかかえって怖い気がして、シルファ先輩に尋ねてみる。

「先輩、タシユア先輩、何も……言わなかったんですけど……」

「うん？ ああ、泳ぎのことか。ルーフェイアがきちんと、泳ぎを習おうとしているからだろう」

「え？」

なんかタシユア先輩って、なにをやっても毒舌で締めくくってしまうのかと思っていただけで、どうも違うみたいだ。

「上手く言えないが……出来ないことそのものには、あまり、タシユアは言わないな」

「そう、なんですか」

ようするにきちんと努力しようとするれば、それなりに評価することらしい。

なんだかそれをすごく不思議に思いながら、シルファ先輩に連れられて海へ入った。



## Episode:17

Tasha side

「じゃあ、ちよつといってくる」

「いつてらっしゃい」

シルファが歩いていく。下級生を連れて歩く様子は、幼稚園の先生のようなだった。

タシユアからしてみれば、「甘い」としか言いようがない。なにしろあのミルドレッドがいるのだ。こうなるのは目に見えている。だがシルファのこういう優しさは、嫌いではなかった。何よりあやつて慕ってくれる後輩が居るのは、他人が苦手なシルファにとっては、いいことだろう。

( ミルドレッドに関しては、疑問が残りますがね )

あれを「慕っている」とは、ふつう言わないだろう。どう鼻屑目に見ても、単純に騒いでるだけにしか見えない。

周りもよく、あの子のああいう行動を、許しておくものだと思う。もつともああいう性格では、言うだけ無駄なのかもしれない。

もうひとつ意外だったのは、ルーフエイアだ。まさか泳げないとは思わなかった。

ただよく考えてみれば、先日海へ落ちた際にも、泳ごうとはしなかった。かなり危険な精神状態だったとは言え、普通なら何かするだろう。

だが泳げないのなら、あの行動も納得がいく。

( もしまた海にでも落ちたら、どうするつもりだったのやら )

前回は運良く人目のあるところだったが、次はどうなるか分から

ない。

泳げないからと、素直に教えてもらおうとする姿勢は評価出来るのだが……やはりこちらにも、甘いとしか言いようがない。

（ ルーフェイア、それは「浮いている」というんです）

後輩の泳ぐ様子を見て、つい突っ込む。だいいちあんな浅いところで、どうやって上達するのだろうか。

だが教えているシルファは、ずいぶん楽しそうだ。教えることに関して、適正があるのかもしれない。

その様子を横目に、タシユアは荷物へ手を伸ばした。この調子ではしばらくかかるだろうから、持ってきておいた読みかけの本の続きでも、と思ったのだ。

日陰に腰を下ろし、読み始める。

そうやって、どのくらい経っただろう？ 何かを感じた気がして顔を上げると、一行の頭数が減っていた。

何となく視線をめぐらせて探してみると、向こうの岩場へと向かう、ナティエスとミルドレッドの姿があった。ルーフェイアの相手に飽きて、遊びに行くことにしたらしい。

それにしても、ミルドレッドの浮かれぶりは常識はずれだ。あれで岩場へ行こうものなら、足を滑らすのは間違いない。

そう思っている矢先、後輩が足を滑らせて尻餅をついた。

（……なんと言いますか）

ここまで予想通りでなくてもいいだろう、そう言いたくなる。よくこれでAクラスにいられるものだ。

ただ、これといって怪我はしなかったようだ。すぐに立ち上がって、沖へと伸びる岩場を、ナティエスとじゃれ合いながら歩いていく。

（　？）

それを見ていたタシユアの表情が、僅かに変わる。何か影を見た気がしたのだ。

ほんの一瞬のことで、気のせいだとも思える。だが、なぜかやけに引っかった。

（武器だけでも、用意しておきますか）

いつものように音も気配もさせず、タシユアは立ち上がった。

## Episode : 18

R u f e i r

ざつと水面を割って、あたし頭を出した。

「だいぶ、上手くなったな」

「いいえ、先輩のおかげです」

シルファ先輩、教えかたがとても上手だ。

おかげで最初はやっと進む程度だったのに、この短時間でどうにか、途中で息を継げるようになってる。

「わたしは……アドバイスしたただけだ」

「でも、先輩に、教えてもらったから……」

「……そうか」

先輩って、すごく物静かで、ミルとは対照的だ。

それにとっても優しい。

「早く先輩なんかといっしょに、泳げるようになるといいんですけど」

「あまり、ムリはしないほうがいい」

「はい」

ロア先輩も頼り甲斐があるけど、シルファ先輩はまた別の意味で、いっしょにいと落ちつく。

「そっいえば……ナティエスとミル……?」

「ああ、あの2人なら、岩場の方へ泳ぎに行った」

「あ、そうなんですか」

確かにあの2人、意外にも泳ぎが上手だ。きっとあたしとじゃつまらなくなつて、向こうへ行ってしまったんだろう。

「いったん上がるか？」

「はい」

先輩があたしの体調を心配して、そう言ってくれたのが分かる。

お姉さんって、こんな感じなのかな？

あたしは一人っ子　ラヴェル兄さんは実際には従兄弟　だから、そういうのはよく知らない。けど多分、間違っていないだろう。

「……あれ？」

2人で海からあがってくると、タシユア先輩の姿がなかった。

「手荷物はここだし……武器でも、見に行ったか？　ちよつと見てくる」

「あ、はい」

なんとなくそのまま、浜辺へ座りこんだ。

碧玉よりまだ濃い、海の碧。

そして真っ直ぐな、空の青。

そこへあいかわらず、銀に見えるほど白い雲がわきあがっていた。

まぶしい。

圧倒されるほどに眩しかった。

あたしがこの間までいた世界とは、あまりにも正反対だ。  
あの頃はこんな世界があるなんて、思ってもみなかった。

同時に、とても不思議な気分になる。

このあたしが、こんなところにいるなんて。

もし一年前のあの日、あの町でイマドと出会わなかったら……。出会わなかったら、今ごろもう、死んでいたのかもしれない。

あまり使いたくない言葉だけど、あれが運命の交差点だったんだろっか？　あの時を境に、あたしの時間の行き先が変わったような



気がする。

きつとムリだと思っていた、夢の方向へ……。そんなことをぼんやりと考えながら待っていたけど、先輩はなかなか戻ってこなかった。気になんて、立ちあがってあたりを見回してみる。

あ。

ちよつと遠いけど、学院がまとめているいろいろ預かってる辺りに、先輩たちの姿を見つける。

けど。

先輩たちが手にしてるの……武器。

瞬間、あたしの身体にも独特の感覚が走る。

この感覚。戦場でいつも感じていたヤツだ。

でも、どこから？

気配を探って、すぐに分かった。岩場のほうだ。

そして思い出す。あそこには確か、ナティエスとミルが……。

とっさにあたし、走り出した。

## Episode : 19 海竜

Sylpha

「ここにいたのか」

「わざわざ捜しに来たのですか？」

言葉だけ聞くと「何をしに来た」と言わんばかりだが、その声音は決して冷たくはなかった。

ルーフェイアあたりが聞いたら、驚くかもしれない。

「姿が見えなかったから……それに、ルーフェイアも心配していたし……」

「まったく。ルーフェイアでは自分の心配が先でしょうに」

いつものことだが、タシユアの毒舌は途切れることがない。

そして私は気づいた。

「タシユア……なにかあったのか？」

タシユアが自分の大剣だけでなく、私の武器 サイズと呼ばれる大鎌で、これは背の部分にも刃がついている まで手にしている。

「何ありませんよ。今は、まだ」

「まだ？」

気になる言いかたに、自分の声が緊張を帯びるのが分かった。

「先ほど、岩場の方向で影を見た気がしまして。

まあ一瞬でしたし、何事もないとは思うのですが、それでも気になりましたからね。念のためです」

「……そうか」

それ以上は、私は聞かなかった。問いたです代わりにサンダルを

履き、足首のストラップをとめる。

タシユアの「気になる」は、何かあると考えて間違いない。  
そして武器を受け取った。

「ルーフェイアにも、言っておかないと」

「その必要はなさそうですよ。気づいたようですから」  
「本当か？」

言葉につられて、向こうの波うちぎわへ視線をやると、確かにルーフェイアが緊張している様子だった。

なにかを探るようにして、辺りへ気を配っている。  
と、突然岩場の方へ駆け出した。

「おや、さすがシユマーのグレイス。気配だけで、相手がどこだか分かったようですね」

「向こうなのか？」

確かあちらの岩場には、ルーフェイアの友だち ナティエスとミル がいたはずだ。

「ええ、確かに向こうですよ おや」

「……なんだ、あれは？」

この時になってようやく、海面を割って“それ”が海中から姿を現した。

まるで小山のような胴体に鰭状の手足。そして長い首と尾。

海竜？

その私の推測を、タシユアが肯定した。

「どうやら海竜の一種ですね。外洋では時々見かけるそうですが、この辺には殆どいないはずです。」

「と言っても、現にいますかね」

いつものように冷静に、彼は指摘する。

それにしても大きい。頭の先から尾の先まで、小さな飛竜くらいはあるだろう。

肉食らしく、開いた顎には鋭い歯が並んでいる。あんなのに噛まれたら、怪我どころか身体が真っ二つだ。

「あんなのが出るとは……」

「そうですね。とはいえ生徒は殆ど海から上がっていますし、実害はないでしょう。放っておくだけです」

こともなげにタシユアが言う。

だが まだルーフェアの友だちが、あがっていないはずだ。そしてルーフェアならともかく、他の下級生がああ海竜相手に無事切りぬけられるとは思えなかった。

「タシユア、私も行ってくる」

言い置いて、私もルーフェアのあとを追うように岩場へと走った。

## Episode:20

Imad

「悪いな、ヘンなことになっちまって」

「いや、それ言うならこっちさ。あの台風娘にまきこんじまって、悪かったよ」

俺とシーモアは、2人でざっと昼食の後片付けを終わって、一休みしてるとこだった。

もつと多人数でやれば早いつてヤツもいるけど、はつきりいつてこういう場合、他の連中は邪魔なだけだ。特にミルとルーフェイアは、そうだったりする。

つかミルが邪魔なのは誰が見ても分かったけど、意外すぎんのはルーフェイアだ。

まったく出来ねえわけじゃねえけど、ともかく手際が悪い。俺やシーモアなんかとはスピード が違いすぎて、結局邪魔になっちまう。しかもそのあと泣いて落ちこむもんだから、手伝わせねえのがいちばん楽だった。

そのうち合間見て、教えてやったほうがいいんじゃない。

「おい、イマド、まだ終わらねえのか？」

悪友どもがわざわざ呼びに来た。

「ったく、てめえら一休みくらいさせろつての」

「終わったんならいいじゃないか、ルーちゃん探しに行かないか」

「ヴィオレイ、オマエが探しに行ったらって、ルーフェイア喜ばないつて」

アーマルがすかさず突っ込む。

それにしても最近、ヴィオレイ頭ん中、ヤバい気がする。暑さで

腐ってんじゃないかねとか、つい思うくらいだ。

「イマド、あんた行っていていいよ。あとは、あたしらのだけだからさ」  
「そうか？　んじゃそうさせてもらっわ」

けど俺らが歩き出そうとした時。

「やゝん、たいへんゝ！　モンスターでたよぉー！」

「なんだって！」

ぱたぱたと騒ぎながら走ってきたミルの言葉に、俺もシーモアも慌てる。

「どこだ、なにが出たんだ！」

「ええとね、あつちゝ！」

ミルが指差した。

なんだよ、あれ。

たしか資料で見たことあつけど、このあたりにはあんまない海竜で、しかも獰猛な種類だ。

それにでかい。

って、そういえばミルのヤツ、たしかルーフェイアと一緒にだったんじゃない？

「ちょっと待ちなよ。ミル、ナティエスとルーフェイアはどうしたんだい！」

同じことを考えたんだろう、シーモアがミルに詰め寄った。

「えつとね、ルーフェイアはシルファ先輩といっしょだったよ。けどナティエス、こっち来てないの？」

「なんだって！」

先輩と一緒にいるルーフェイアはともかく、ナティエスが一人となると……。



## Episode : 21

「あれえ、途中までいっしょだったんだよ。 おつかしいなあ??」

「ミル、このバカッ! あんた !!」

「やめろ、シーモア。こいつに言うだけ無駄だ。それより俺のツールキットよこせ!」

「あ、ああ……ほらっ!」

シーモアの投げたキットが、綺麗に弧を描いて俺の手の中に収まる。

「まって、あたしも行くう!」

およそ緊張感とは無縁のような嬌声で、ミルも名乗りをあげた。

「あたしもって、お前が来たって……!」

迷惑、そう言いかけて俺は言葉を途中で飲みこむ。

ミルがマジだ。

いつのまにか、持ちこんでいたらしい銃を取り出してる。

「よし、援護頼むぜ」

性格はともかく、こいつ腕だけは折り紙付きだ。

「もっちゃん!」

そのまま俺ら、走り出す。

「最後にナティエス見たの、どこなんだ?」

「あっち」

5歳児みたいな調子でミルが答える。指差したのは岩場のほうだ。

あれか!

確かに突端から少し沖の岩の上、人影が見える。それもなんでか



2つ。

片方は間違いなく、ナティエスだろう。  
けどもう片方はどうみても……。

「ルーフェイア?!」

泳げないはずのあいつが、どうしてあんな場所にいるんだか?  
でも不思議に思っているヒマがない。もう海竜がルーフェイアたちの近くまで迫ってる。

もっともあいつも黙っちゃいなかった。

突然天から雷撃が海竜に降り注ぐ。あいつ得意の上級魔法だ。  
そこへ更に銃声がこだました。

この距離で全弾命中かよ。

やったのはミルだ。曲がりなりにも、Aクラスにいただけはある。  
この連続攻撃で、さすがの海竜も動きが止まった。ルーフェイアたちを襲うのやめて、咆哮をあげる。

けどなんか、海竜の様子がおかしい。

倒れるとかじゃなくて、めちゃくちゃに暴れてるような……?

「おい、ミル! お前なんの弾撃ったんだよ!」

「え、あれ? あ、暗闇の魔法込めた弾だった」

前言撤回!

あのサイズのモンスターが闇雲に暴れまわったら、下手に狙われるより危ねえし。

## Episode : 22

「ミル、てめえなに考えてるんだよっ！」

「だって、撃つたらそうだったんだもん」

と、ごっつん、と景気のいい音がした。

「あゝ、もう、いったいなあ！　せつかく撃つたのにひどいっ！！」  
「弾確認しないで撃つ方が、どうかしてるんじゃないのかい？」

いつのまにか傍へ来ていたシーモアが、ミルの頭を殴りつけたらしい。

「いいもん、もうやんないから！」

「二度とやるんじゃないよ！」

非常時だったのに、まるで漫才だ。けど幸い、海竜は暴れるのに必死で、ルーフェイアたちを襲うの忘れてやがる。

今のうちに足止めしておけば……。

「アーマル、お前いつもの武器、持ってきてつか？」

後ろへ来ていたダチの一人に、声をかける。

「サブのヤツなら」

「じゃあ悪い、ちょっと手伝ってくれ。氷矢あるか？」

俺が使う武器は、どれも射程が短くて、こういう状況だと行動が限られちまう。けどアーマルが使っているクロスボウ系は、かなりのロングレンジだ。

「さすがに氷矢は、持ってきてないな」

「んじゃ空っぽのヤツ」

「ほいよ」

ダチがひとまとめ、俺に矢を渡す。鏃が空の魔力石で出来たやつ

だ。

それを手にとって、魔力を込める。何でか知らねえけど、俺は昔  
っから、魔方陣とかナシでこれが出来た。

海竜の方は相変わらず、すげえ勢いで暴れてる。

ったく、ミルのヤツ、どうしようもねえな。

毎度のことながら、あいつが絡むとなんだって、こつも事態がや  
やこしくなるんだか。

「おし、これ頼むわ」

「オッケー」

今までいっしょにやってきたダチだ。何も言わなくても、何をど  
うするかなんて通じる。

立て続けに矢が放たれた。

「よっしゃ、全部いったぜ」

「さんきゅ」

礼言って、俺は集中する。

行け。

手応えがあつた。

石に込めておいた魔法が、発動する。

込めておいた魔法は氷系だ。だから海竜の身体を中心に、氷が浮  
かび始める。

もっとも俺の魔力じゃ、どうやって全面凍結ってワケにはい  
かない。

けど、あいつなら。

そついう確信が、俺の中にあつた。



## Episode : 23

R u f e i r

どうしてこいつがここに？

あたしがいちばん最初に思ったのは、それだった。この海竜、外洋ならたまに見かけるけど、このあたりにはいなかったはずだ。

幸いなのは、この種類としては、まだそれほど大きいほうじゃないことだ。けど、とても獰猛だから油断できない。

「ナティエスっ、ミルっ！」

2人の名前を呼びながら、あたしは岩場の方へと駆けた。そして突端まで行つて、ようやくナティエスの姿を見つける。

でも、思わず足が止まった。

彼女がいるの、もう少し沖の岩の上だ。今のあたしじゃ、泳いで渡るにはかなり厳しい距離だ。

しかもどこかへ打ちつけてもしたのか、足からかなり出血してる。このまま放つておいたら、間違いなく餌食だ。

「ナティエスっ！！」

「ルーフェイア？！」

大声で呼ぶと、ナティエスが振り向いた。

互いの瞳が合う。

鳶色の、諦めきつた瞳。

そこへ血のにおいを嗅ぎつけたのか、海竜が鋭い歯の並んだ口を開けて迫る。

「だめっ！！」

瞬間、周囲がぼやけた。

海も空も判然としなくなつて、真っ白な光が走つて。

「る、ルーフェイア?!」

気が付くと、目の前にナティエスがいた。

「どうやって、ここまで? 魔法??」

その問いを聞きながら、あたしの身体はまだ勝手に動いていた。

海竜のほうへ手が突き出されて、次の瞬間呪文もなしに、凄まじい雷撃が海竜を襲う。

まただ。

反射なんかとは違う、「何か」が自分を動かす感覚。

確かにそこにある、でもあたしじゃ使えない力を、その「何か」は平然と引き出して振るうのだ。

気味が悪かった。

シユマーのグレイスには、いろいろ嫌な噂が伝えられている。

人が所有出来ないはずの精霊を平然と従え、上級呪文を詠唱なしで発動させ、失われたはずの魔法を操る……。

そして、その通りのことをしている自分がいる。

怖かった。

このままいつたらどうなるんだろう、そう思うと背筋が寒くなる。

もっとも今は、それを悩むのは後だ。この海竜をどうにかして、

ナティエスを岸へ返さなくちゃならない。

## Episode : 24

「ナティエス、足、大丈夫？」

もついちど魔法で海竜をけん制しながら、必死に気持ちを切り替えて、ナティエスに話しかけた。

それにしてもミル、いないとこ見ると、ちゃっかり逃げ切ったんだろうか？

「慌てて岩に引つ掛けたみたいで……こんなに切っちゃうなんて」  
ちらつと見ると、たしかにとても泳げそうにない傷だ。

「自分で魔法、かけられる？」

「やってみる」

治療はナティエス本人に頼んで、あたしは次の呪を唱える。

「遥かなる天より裁きの光、我が手に集いていかずちとなれ  
ラウノス・レイジッ！」

詠唱に呼応して、天からいかずちが降り注いだ。海竜の身体に、放電がまわりつく。

さつきも雷撃が効いただけあって、海竜がひるんだ。

でも、これだけじゃ……。

ナティエスは今泳げない。それを安全に岸へ返そうと思ったら、海竜を倒すしかなかった。

かといってここで全力を出せば、間違いなくナティエスを巻き込んでしまう。

どうしよう。

足止めが出来ればまだいいけど、それもあたし一人ではムリだ。  
せめて、誰かの手助けがあれば……。

そう思いながらも何か手がないかと、魔法にひるむ海竜を見る。

と、立てて続けに銃声が響いた。

「この距離で、全弾命中って……」

距離からすれば決して大きくない頭部に、きちんと弾が当たっている。ただ遠いのと相手が大きいので、思うほど効果は出していない。

「あ、ミルだよ、きつと」

「……うそ……」

人は見かけによらないって言うけど、本当だ。

でも、なんだか海竜の样子がおかしい。なんて言うんだろう、苦しんでると言うよりは、闇雲に暴れてるような……？

少し考えて思い当たって、ちょっと背筋を冷たいものが伝う。

でもたぶん間違いない。

「ミル……闇魔法の弾、使ってる……」

視力を奪われて暴れてる海竜は、見境がない分ある意味、狙って襲われるより危なかった。

ミルのほか、そう思いながら、ナティエスを押し倒して覆いかぶさる。

あたしの背中の上を、海竜の頭が通り過ぎた。

これじゃ倒そうにも、近寄ることさえ出来ない。かといって一気に勝負に出たら、やっぱりナティエスを巻き込んでしまう。



## Episode : 25

彼女と一緒にというのが、かなりの足枷だった。

あたしひとりなら発動範囲なんて気にしないで魔法が使えるけど、彼女は巻き込まれたらただじゃ済まない。

せめて足止めに魔法を使いたいけど、丁度いいものがない。その手の睡眠魔法やなんかは、効果の信頼性がいまひとつだ。

いつあの暴れぶりに巻き込まれるか分からないのに、効くまでか  
けなおしているわけにはいかない。

かといって、一人じゃ足止めもできないし……。

と。

「矢？」

向こうから飛んできた十数本の矢が、次々と海竜の身体に突き刺さる。そしてすぐ海竜のウロコと周囲に、小さな氷が出来始めた。

そうか！

イマドはあたしと違って、魔法を発動させるよりも付与させる方が得意だ。今はたぶん矢に、冷氣系の魔法を付与させたんだろう。

その間にもある程度持続して効果を発揮する冷氣魔法は、徐々に凍る範囲を広げつつあった。

これなら、足止めができる。

「幾万の過去から連なる深遠より、嘆きの涙汲み上げて凍れる時となせ フロスティ・エンブランスっ！」

立て続けに、氷系の最上位を放つ。思惑通り、海竜の周囲が凍結した。

驚いた海竜が咆哮を上げたけど、もう身動きが取れない。

もつとも、ただ単に魔法を撃ち込んでもこうはいかない。イマドのおかげで水温が下がっていたからこそできた、ムチャと しかないやり方だ。

「フロスティ・エンブランス！」

こんどは後ろへ振り向いて、冷氣魔法を魔法を海中に叩き込む。こっちはまだ水温が高かったけど、それでも何度か繰り返すと、どうにか渡れそうなくらいの橋が出来た。

「ルーフェイア、すごいね」

「だつていま、海竜……動けないし」

襲われながらじゃさすがに、こんなことしてる余裕はない。

「えーつと多分、あたし言ったのの意味違うかも。でもたしかに、海竜動いてたら、こんなこととしてられないよね」

「……え？」

微妙に話がかみ合わない。

「ともかく、今のうちに行かなきゃね。よいしょつと……」

足をかばいながらナティエスが立ち上がって、顔をしかめた。かなり痛むみたいだ。

「だいじょうぶ？」

「痛いけど、逃げなきゃだし」

見たところ、血だけは止まっている。でもこれ以上は魔法でムリに治すより、ちゃんと治療したほうがいいだろう。

## Episode : 26

「えっと、ちょっと待って」

せめてと思つて、ナティエスに浮遊魔法をかけてみる。  
彼女の顔が明るくなった。

「あ、これなら楽かも。さっきより平気」

その声にほつする。

「2人とも、大丈夫か？」

振り向くと、シルファ先輩の姿があつた。あたしたちがもたもたしている間に、氷の橋を渡ってきたみたいだ。

「はい、大丈夫です」

「そうか。」

2人とも、下がるんだ。あとは、私たちがやる」

「わかりました」

視線は海竜に向けたままの先輩に、そう答える。なにしろあたしたちは丸腰だ。ここは、お願いするのがいちばんいい。

まずナティエスを先に行かせる。続いてあたしも行きかけた時、咆哮が響いた。

振り返つてみると、氷にヒビが入り始めてる。さすがに長時間は、持たなかったみたいだ。

そのとき、不思議な光が視界に入った。不審に思つて光源を探す。

シルファ先輩？

先輩の身体が、燐光を発しているように見える。  
それも物理的な光じゃない。強力な魔法を使うときに起こる、魔

力の発光現象だ。

同時にあたしは、もうひとつ独特の気配を感じ取っていた。あたしにとつてはあまりにも馴染みすぎた気配　精霊。その気配が強まっていく。

けど召喚される様子はない。

代わりに、シルファ先輩の髪から色が薄れだした。漆黒のはずの髪が徐々に色を失い、やがて輝く白になる。

その時にはすでに身体の内も、残光を描くほどになっていた。

これ、もしかして……？

精霊を憑依させて力を借り、戦闘能力を上げる方法はよく知られている。

ただこれはけっこう危険もあって、処理された精霊の、一部の力しか引き出せない。力欲しさに完全憑依させたら、乗っ取られて狂うのがオチだ。

でもごくまれに、それが出来る人がいる。

もちろんそれほど長時間は持たないし、使える精霊も限られる。なによりとても危険だ。ただその間は、通常の憑依を遥かに上回る力を、得ることが可能だった。

けれどそれをシルファ先輩が使っなんて、想像もしなかった。

「早くさがるんだ」

「あ、はい」

煌く白光に彩られた先輩が、あたしに声をかけた。確かにこの状態で武器を振るうには、あたしは邪魔だろう。

大きくなる氷のヒビを見ながら、急いで下がる。



## Episode : 27

と、今度は風に乗ってタシユア先輩の呪文詠唱が聞こえた。

「……の嘆きと怒りの咆吼をもちて……」  
聞いたことのない韻。

いや、ちがう。聞き覚えがある。

まさか、禁呪？

ちよつと信じられなかった。

禁呪は要するに精霊が使うもので、人の器で扱えるようなものじゃない。

呪文そのものはいちおう誰でも唱えられるけど、発動させると代償として、生命力までもぎ取られて衰弱する。魔力が弱い人が使うと、死ぬことだってあるくらいだ。

それを、こんな風に簡単に扱うなんて。

でも、シルファ先輩がもう海竜に突っ込みかけている。このタイミングで魔法をかけたら、巻き込まれるのは確実だ。いくら精霊を完全憑依させているといっても、禁呪の直撃には耐えられない。

なのにタシユア先輩、まったく気にする様子がなかった。

そして魔法が発動する。

一瞬にして暗くなった空から十数条のもいかずちが降り注ぎ、あたりを薙ぎ払い、帯電した風が逆巻く。

空気が焼け焦げて、あの独特の匂いがただよった。

さすがにこれは効いたらしく、海竜が咆哮をあげて動きを止め、その長い首を落とす。

逃さず、シルファ先輩のサイズ（大鎌）が一閃した。

抜群のコンビネーション。

ほんの僅かな発動範囲の差とタイムラグとで、シルファ先輩は無傷だ。

どさりと音を立てて、海竜の首が落ちる。シルファ先輩がほつと息を吐き、燐光が薄れ始めた。でもその時。

「先輩、うしろっ！！」

切り落とされて背後へと落ちた海竜の首が、突然牙をむいた。まさかの事態に、一瞬シルファ先輩の動きが止まる。

いけない！

戦いの最中には、この一瞬が命取りになるのだ。

とっさにあたしは呪文を唱え始めた。

選んだのは加速魔法。本当なら海竜のほうをどうにかするべきだけど、今はその必要がなかった。

理由はわからないけれど、それはイマドがやってくれるという確信がある。

「すべてを包む流れよ、幾重にも重なるその手にて……」  
呪文が、完成する。

## Episode : 28

I m a d

「マジかよ」

本気でそれしか、言葉がなかった。

タシユア先輩のあの魔法、どうみたって普通のやつじゃねえし。それにシルファ先輩、噂は聞いたことあったけど、あれほどとは。つか、水着姿でサイズ振りまわすってのも、結構見ものだった。

とりあえず海竜が首を切り飛ばされて、片付いたらしい。俺は豪快に凍った海見ながら、ルーフエイアの方へ歩き出した。

それにしてもあのでかい海竜が氷に押さえつけられた挙句、コゲて首のない胴体になってるのは、けっこう情けない姿だ。

首は首で、あっちの方に転がってるし。

え？

今、首が動いた……？

一瞬目の錯覚かと思ったけど、そうじゃなかった。

間違はなくヤツ、動いてやがる。信じらんねえ生命力だ。

しかもシルファ先輩、さすがに気を抜いてる。

とつさに、魔力の付与に入った。狙いはあの海竜の首に叩き込まれた、ミルの弾丸だ。

集中して、波動捕らえて、ねじ伏せる。込められてた魔法を、強引に違うものに切り替える。

行けっ！！

この魔法なら、絶対にルーフエイアとぶつからねえはずだ。根拠はねえけど自信はある。



海竜の身体に残ってた幾つもの弾から、重力魔法が発動した。

T a s h a   s i d e

（泳ぎ足りなかったのですかねえ……）

万全を期したのかもしれないが、足止めされている海竜に、シルファがああ荒業を出してくるとは思わなかった。

泳げない後輩の相手ばかりで、力が余っていたのだろうか？

見かけからは想像しづらいが、シルファは意外なくらいの前衛派だ。いざとなれば即座に前へ出て、切り込んで刃を振るう。

いずれにせよ、おおむね片付いたようだ。

もつとも、気を抜くつもりはなかった。なにしろ相手は海竜だ。その生命力は尋常ではない。完全に死ぬのを見届ける必要がある。

（シルファ、緊張を解くのが早すぎますよ）

首を切り飛ばしただけで戦闘体制を解くパートナーに、軽いため息をつく。あれほど普段から、言っているのだが。

人間にせよ魔獣にせよ、死に際の一瞬は危険だ。何をしてくるかわからない。

案の定後ろの海竜が、首だけの状態でまだ、動いている。

さすがに危険だと判断して、タシユアは再び呪文を唱え始めた。

禁呪の連続になるが、もう1度くらいなら差し支えないだろう。

出来れば普通の魔法にしたいところだが、ちょうどいい手持ちがない。使おうとシルファを巻き込んでしまう。

生命力を削られるのを承知で、タシユアは呪を発動させた。



## Episode : 29

Sylpha

「先輩、うしろっ!!」

ルーフェイアの叫びで、もういちど私の身体に緊張が走った。

絶命したとばかり思っていた海竜が、首だけとなって尚牙をむく。

驚いて、一瞬対応が遅れた。

首が跳ね上がり、大きく口が開く。

間に合うか？

サイズを持ちなおし、踏みこむ。

まだ精霊ヴァルキュリアの憑依状態は解けていないが、間合いが近い分、先に動いた向こうが有利だ。

案の定向こうの方が速い。さすがに怪我を覚悟する。

が、突然海竜の動きが遅くなった。同時に私の身体がスピードを増す。どちらも魔法だ。

あの2人か？

これだけ離れていてこの連携を見せるとは、なかなかやる、そう思う。

さらに私の良く知る気配が辺りに満ちた。風に乗ってか、呪文の詠唱が聞こえる。

「闇の底に眠りし混沌の力、一条に集いて  
タシユアの禁呪だ。」

目を射る光の矢が飛来して、海竜の首に突き刺さった。

たちまち松明のように、首が白い炎に包まれる。生命力を削り取る禁呪を、タシユアに連続で使わってしまった自分に、腹が立った。

その思いを叩きつけるようにして、サイズを振るう。海竜の首を、今度は縦に両断した。

燃えながら、首が左右に分かれて落ちる。しばらくうかがったが、さすがに今度は動かなかった。

ようやく緊張を解く。

「先輩、大丈夫ですか？」

いちばん近くにいたルーフェイアが、真っ先に駆けてきた。

「すみません、あの、あたし、とつさに……魔法、かけちゃって」  
第一声は、なんと謝罪だ。

「あの状態じゃ……もしかしたら、危険だったかもしれないのに……」

下手な言葉をかけようものなら泣き出しそうな表情で、少女が私を見上げている。

先ほどから連続で凄まじい魔法を放ち、海竜を丸ごと凍結させ、さらに絶妙の連携プレーまで見せたのとはまるで別人のようだ。

「なんでもなかったんだ。気にしないでいい」

「でも……」

「いいんだ」

私がつっぱり言うと、ようやくルーフェイアも表情を変えた。どうにか納得したらしい。

しばらくそのままその場にいたが、そのうち海竜の首　というより残骸　に歩み寄り、つま先でつつき始めた。

## Episode : 30

「もう、動かないですね」

「あまり、動いて欲しくはないな」

しかし……美少女がこういうものを、平気でつついているというのは、どうにも形容しがたいものがある。

戦場育ちで見なれていると言えば、それまでなのだろうが……。

「とりあえず、戻らないか？」

「あ、はい」

見かねて言った私の言葉に、ルーフェイアは素直に従った。  
少し溶け始めた橋を、2人で急いで歩く。

「冷たい……」

ルーフェイアが小さくつぶやいた。

当然だろう。彼女は素足だ。それで氷の上を歩けば、冷たいに決まっている。

「ルーフェイア？」

「あ、はい？ きゃ！」

可哀想に思っただけ抱き上げると、少女が悲鳴を上げた。

「あ、すまない。いま降ろす」

「いいです、このままで」

まるで母親に抱かれた子供のように、ルーフェイアが身体を預けてくる。

不思議な気分だった。少女が自分の妹のように錯覚する。

無条件の、疑いをまったく挟まない信頼。それをこつとも簡単に見

せるとは。

この子はよほど、周囲に愛されて育ったのだろうな。

そうでなければ人は、疑うことばかり覚えるものだ。またそうであつたからこそ、こんな優しい少女が戦場に出されて尚、真っ直ぐに成長したのだろう。

少し羨ましい気がした。この学院で、ルーフェイア以上に愛されて育った者は、いないだろうと思う。

意外に距離のある海面を渡りきると、タシユアともうひとり下級生 イマド、といっただろうか？ が待っていた。

「タシユア、身体は大丈夫なのか？」

禁呪を連続で使ったタシユアが心配で、真っ先に尋ねる。

「私の身体を心配するのなら、その分戦闘に気を向けなさい。いつも言っているはずですよ。完全に死を確認するまで気を抜くなど」

厳しい。

だが私を心配していればこそその言葉だ。

「次は気をつける」

「言葉ではなく、態度で示して欲しいものですね。」

ところでいつから、シルファまで保護者になったのですか？」

## Episode : 31

例によつてタシユアが、嫌味とも取れる言葉を付け加える。もつとも今度は、口調にはからかいが含まれていたのだが、これはルーフェイアには分からなかったようだ。

「あ！ す……すみません！！」

慌てて私の腕の中から降りようとして、落ちそうになる。

「急に暴れるな。落ちるぞ」

「すみません……」

素直というのだろうか。よく謝る少女だ。

とりあえず足を怪我しなそうな場所を選んで、降ろしてやった。

「先輩、ありがとうございました」

「いや、いいんだ」

私の傍に立ったルーフェイアは、頭一つ以上身長が違った。

年令のわりに小柄で、華奢な体つき。

これでよく、あの海竜と渡り合ったな。

友人のためとはいえ、あんなものの前に飛び出すなど、そうそうできるものではない。

そして気が付いた。

「そういえばルーフェイア……いつから泳げるように？」

さっき教えていた時は、とてもあの距離を泳ぎ切れるほど、上手くはなかった。

なにより人というのは、そう簡単になにかが出来るようになるものではない。そうだというのなら訓練は無用だ。

だがこの質問に、少女の顔が曇った。泣き出しそうな瞳になる。

「え、あ、その……すまない、何か悪いことを言ったか？」  
何かに怯えたような表情。

「どうしたんだ？」

重ねて訊いてやっと、ルーフェイアが言葉を発した。

「怖い……」

「え？」

いまひとつ要領を得ない、切れ切れの言葉が続く。

だがそれをひとつひとつ訊きだして、つなぎ合わせて……私は言葉を失った。

自分の意思とは無関係に、振るわれる力。

そういうものが、自分の中にあるのだと、この子は言うのだ。

信じ難いが、嘘をついているようにも見えない。それにあの戦闘力や何かを考えると、かえって納得がいくくらいだ。

こういう話を、普段なら一笑に付すタシユアが否定しない辺りからも、事実だろうと思った。以前からこの子については、タシユアは何か知っている節がある。

だが、どうすればいいのだろうか？ 何か言ったほうがいいとは思  
うが、言葉が出てこない。

仕方なく頭を撫でてやったが、この子は泣き止まなかった。



## Episode : 32 意思

R u f e i r

「そういえばルーフェア……いつから泳げるように?」

先輩の何気ない言葉が、ぐさりと胸に突き刺さった。

さっきのことを思い出す。

自分が自分でなくなる感覚。

人ならできないはずのことを、やってしまう恐怖。

涙がこみあげてくる。訊かれたくない。思い出したくない。

「え、あ、その……すまない、何か悪いことを言ったか?」

声が詰まって、先輩の質問に答えられない。

いつものことだけれど、恐ろしくて仕方がなかった。

自分が、自分でなくなるなんて。

「どうしたんだ?」

答えようとしたけど、やっぱり涙ばかりで、声にならなかった。  
ほんとうにこのままで、大丈夫なんだろうか?

「あの」力がいつか、あたしを乗っ取ってしまうような気がして、  
とても怖かった。

次々と涙があふれてくる。

こんな力らない。

あたし普通が良かったのに……。

いちばん最初は、3つの時だった。

あの頃あたしはまだ戦場にはいなくて、どこかの町に住んでいた。

父さんはいなかったから、たぶんどこかへ傭兵として出てたんだろう。母さんとあたし、それに住みこみのお手伝いさんの、3人だったはずだ。

あの日、母さんはどこかへ出かけて、家にはあたしとお手伝いさんの2人だった。

ベッドの中でうとうとと昼寝をしていて、目を覚ました。悲鳴が聞こえたのだ。

でも寝ぼけていたせいなんだろう、たいして怖いとも思わずに階段を降りて、居間をのぞいた。

そしてあたしが見たのは、血溜まりと、背に短剣を突き立てたまま倒れたお手伝いさんと、知らない男たち。

何が起こったのか分からず立ち尽くすあたしを、振り向いた男たちの視線が捕らえる。

何かの罵り声と、振り上げられる短剣。

当然どうしたらいいかわからなくなつて　けれど身体が動いた。あたしの中の「何か」は、あまりにも冷静に身体を動かし……さつきみたいにあたしの身体は、片手を上げた。

手から吹き上がる、「黒い炎」。

それはうねりながら虚空を走つて、男は炎が触れた場所から、塵になつて消えて行つた。

もう一人の男がそれを見て、腰を抜かしながらあたしに言った。「化け物」と。

ちょうど母さんはそこへ帰つてきて、即座に残る男を叩き伏せて、それからあたしのやったことに気づいた。

呆然とした表情で、あたしと室内とを見ていたのを、覚えてる。

ただ記憶はそこまで、あとははっきりしない。ひたすら母さんの腕の中で泣いて、慰めてもらっていた気がする。

でもあの言葉、「化け物」というそれを、あたしは今も否定できなかった。あの時あたしがやったことは、明らかに人の範疇を外れていたのだから。

いずれにしてもこの一件であたしが「グレイス」だと発覚し、その後は戦場で暮らすことになった。

理由は簡単。

とつさの行動で人を殺しかねないこの幼児は、そういう場所に置いておくに限る。

戦場なら普通の社会と違って、何人殺したって問題はないのだから。むしろそうして磨き上げた方が、シユマーの次期総領 としてはふさわしい。

そうやって、どれほどこの手を血に染めたのだろう……。

終わることのない、悪夢。

「……こんな力、いらない……」

虚しい眩きが、あたしの口から漏れた。

## Episode : 33

Sylpha

「……こんな力、いらない……」

かける言葉が見つからなかった。

まさかこんな少女が、これほど重いものを背負っているとは……。場が沈黙する。

だが、それをあっさりと打ち破った者がいた。

「だから何だと言うのです？」

タシユアのまるで、「くらだならい」とでも言いたげな口調。

口調だけでなく、彼にとっては事実そうだろうと思う。何しろタシユアは、他人に関心がない。

他人に干渉されるのをとても嫌う代わりに、一切他人にも干渉しない。それがタシユアの生き方だった。

幼かったり障害があったりという、やむを得ない事情があればまた別だが、そうでなければ自分にも他人にも同じように厳しいのだ。学園内でも一、二を争うのではないが、それほどに過酷な中を自力で生き抜いてきたことが、よけいにそうさせているのかもしれないかった。

「欲しくないといっても、現に持っているのです。逃げることばかり考えないで、立ち向かってはどうです」

辛辣な言葉。

だが、私にしか分からないかもしれないが、その声は決して冷たくはない。やっぱりタシユアはこの子について、何か知っているのだろう。

「泣いているだけで何かが変わるのでしたら、一生そうしていいさ  
い。自分が何を持っているかにも気づかない愚か者には、それがお  
似合いです」

この厳しい言葉の意図が、ルーフェイアに分かるだろうか？

分かって欲しかった。

なぜならタシユアは……。

「もう一度、よく考えてみるのですね」

最後にそれだけ言って、タシユアは背を向けた。いつものように  
音も立てず、気配もさせずに立ち去る。

「ルーフェイア、タシユアの言うとおりでと思う。辛いだろうが…  
…よく考えてみるんだ」

私もルーフェイアの頭を撫でながら、言った。

まだ11歳でしかない少女に、しかも本人の意思とは関係なく重  
いものを背負わされているのに、こんなことをいうのが酷なのは、  
私にも分かる。

だが人は、誰でもいつかは独りで歩き出さなくてはならない。

だから、ルーフェイア。

「タシユアの受け売りだが……一歩を踏み出さない限りは、何も進  
歩はない。何でも良いから、一つはじめてみるんだ」

そして私も、タシユアの後を追った。

## Episode : 34

I m a d

浜辺に、ルーフェイアのヤツが立ち尽くしてる。

「だいじょぶか？」

「……うん」

だいじょぶなワケねえのに、そんな答えが返ってきた。

隣に俺が座ると、こいつも砂浜に腰を下ろす。

昼下がりの空に、波の音が響いた。

「その、なんかワケわかんねーの、ずーつとなのか？」

俺の問いに、ルーフェイアのヤツが泣きながらうなずいた。

「んじゃ、きつついよな……」

タシユア先輩の言いたいことも、まあ分かる。自分のことなんだから、泣いてねえでなんとかしろ、ってんだろ。

けど俺の見るかぎり、ルーフェイアのその「なんか」は、自力でどうなるようにも思えなかった。

つか自力でどうにか出来るなら、ぜったいこいつはやってるわけで。それがただ泣いてんだから、散々試してダメだった、ってことなんだろう。

それをどうにかしろ、ってのもなあ。

先輩たち知らねーからしゃあねえけど、ずいぶん言い草だ。ただ、なんか状態変えたほうがいいってのは、俺も賛成だった。このまんまの状態続けてたら、そのうちこいつ、潰れるだろう。かといって、その「問題」は片付けようがないわけで……。

「どうして……あたし、なんだろう……」  
当たり前っちゃ当たり前前の疑問を、ルーフェイアのヤツが口にする。

「もっと、向いてる人……ほかに……」  
どっか思いつめたふうの声に、俺は答えた。

「考えても、しゃーねえんじゃねえか？」  
「え？」

驚いたようすで、ルーフェイアのヤツが顔を上げる。俺の言葉が、かなり意外だったらしい。

「んー、なんてのかな。今ここで考えても、ぜったい理由とかわかんねえし。」

「だったら考えるだけ、無駄だろ」

「それは……そう、だけど……」

「口じゃそう言いながらもこいつ、どっか納得できねえらしい。」

ただ俺的にはそろそろ、こういう表情じゃなくて、もっと楽しげにして欲しかった。

「俺がそーゆーの持つてるわけじゃねえから、分かってねえかもだけどさ。」

「けどおまえ、とりあえず今ふつうにやれてるし。学院に来たから、当分は前線出ねえで済むし。」

「なら、今はそれでいいんじゃない？」

ルーフェイアのヤツの、呆気に取られた顔。  
それからこいつが、ぽつりと言う。

「イマド……適當すぎ……」  
「るっせ」

思わず言い返すと、いつも通りこいつが謝った。

「え、あ、ごめん……えっと、そういう意味じゃ、なくて」  
慌てる様子が、見えて面白い。



## Episode : 35

「上手く言えねえけどさ、けっきょく何でも、なるようにっきゃならねえだろ。」

だから何もしねえってのはヤベえけど、やれるだけやったら、あとはしゃーねーって」

ルーフェイアのヤツが下を向いた。

唇から言葉がこぼれる。

「けど、もし、もう少し……」

何かやれてたら、ってんだろ。俺もこれは昔やらかしたから、少し苦くなる。

けど だから言える。

「しゃあねえって。俺らカミサマとか、そゆのじゃねえから、何でもできねえよ」

つらい諦め。チビの頃信じてた、何でも出来るって気持ちを捨てるのは、楽しいもんじゃない。

けど、それが現実だ。

「やれるだけやっても、気がつかねえとか足りねえこと、あるさ」

「……………」

たぶん真面目なこいつは、「どうしようもなかった」ってことを、受け入れらんなかったんだろ。

誰も悪くないってのは、ある意味で逆につらい。憎む相手がいたほうが、ずっと楽だ。だからこいつは自分を責めて、自分を納得させてたんじゃねえだろうか。

つか、俺もそうだった。

けどどんなに責めても、過ぎたことは変わらない。だからある程度で見切りつけて、進まなきゃダメなんだと俺は思う。

「てかさ、こんなこと言ったら、怒るかしんねえけど。」

けどおまえの兄貴、おまえのそういうの、喜ばねえんじゃない？」

「！」

何かに気がついた、ルーフェイアのやつがそんな顔をする。

「おまえの兄貴よく知らねえから、あんま言えねえけどさ。でも、そんな気がすんだよな」

「そう、かも……」

ふっとこいつが、何かを吐き出すみたいに、ため息をついた。

受け入れたくねえけど、受け入れるしかない。そんなルーフェイアの表情。

それから、言う。

「……ごめん」

「いいって」

何が、とは聞かなかった。だいいちこいつ自身も、突っ込まれたら答えらんねえだろう。

今までのいろんな重いものに、ある程度ケリつけてくれりゃ、俺としては十分だ。

「とりあえず、もちつといいとこ見ろよ。あんま後ろ向いてつと、よけい落ち込むぜ？」

「……そうだね」

こいつが淡く微笑む。今までと少し違う、穏やかな笑顔だった。

やっぱ素直だよな。

人になんか言われたからって、普通はこんな簡単に、変わろうな

んてできない。けどそれがやれるのが、ルーフェイアの強みだろう。

## Episode : 36

「まあおまえ以上の事情あるやつとか、他にいねえだろうから、落ちこんじまうの分かるけどな。」

けど金に困ったことねーし、親いるし、その辺ちつといいんじゃない？ 俺から見ても、けっこう羨ましいしさ」

「あ……！」

声をあげたルーフェイアのヤツに、今度は思わず突っ込んだ。

「おまえもしかして、気づいてなかったのか？」

「ごめん……」

可笑しくなった。こういう天然ボケは、いかにもこいつらしい。つい笑い出した俺に、ルーフェイアのヤツが怒った調子で言う。

「そんな、笑わなくても……あたしが、悪いけど、でも……」

「悪い悪い」

謝る側と謝られる側が反対の気がすつけど、まあそれはそれだ。

「ま、みんないろいろあるって。おまえがトップクラスだとは思っけだよ」

「そうだね、そうだよね……」

またルーフェイアがうつむく。でも、泣こうとしてじゃなくて、考えてた。

「泣いてても、変わらない、から……」

こいつがいつも必死なのは、俺にもわかってた。前も見えないほどの荷物で、どっちへ行ったらいいかわからない、ようするにそういうことだ。

そして今、確かにこいつは歩き出そうとしていた。  
優しいことが取り柄なのに、まったく筋違いな荷物を背負ったまままで。

ルーフェイアが顔を上げる。

「あたし……自分のことしか、見えてなかった」  
自嘲したような表情。

「やっぱお前、すごいぜ。」

人前で自分のことを、こんな風に言えるやつは少ない。  
いい意味でプライドを持たないルーフェイアを、羨ましく思った。

「あたしひとりが辛いんだと思ってた。ひどい、って。」

けど、あたしだけじゃなくて……みんなそれぞれ、辛くて……」  
深い碧の、真っ直ぐな瞳。

まるでガラスのように澄んで……。

「そゆことだな」

その瞳におされながら、そう俺は答えた。

この世界のどこにも、辛くないやつなんていない。

先輩たちは言うに及ばず、シーモアなんざストリートキッズして  
たし、ナティエスもそうだ。ミルもあれで、けっこういろいろあつ  
たらしい。

そして俺も、ルーフェイアとは比べものにやならねえけど、それ  
なりにあつた。

この年でなんで、って気はあるけど、それを言ってもどうにもな  
らない。その他にだって辛いことなんか、数えるのも馬鹿らしいく  
らい次々と起こる。

けど やるしかない。

「頑張つてりゃいつかはいいことあるなんて、そんな下らないこと  
言わねえ。でもなにもしないで泣いてたら、そこで終わりだかな。  
だからさ、泣いてもいいから、やってみるよ」

「 そうだね、そうする」

優しいこいつのことだ、またなんかあれば、きっと泣くだろう。  
辛さに嘆く時もあるだろう。

けど今度は間違いなく、自分で立ち上がるはずだ。

真に強いやつは真に優しい。その言葉を思い出した。  
これは、その強さじゃないんだろうか？  
少なくとも俺には、そう思えた。

## Episode : 37

R u f e i r

「先輩、その……さっきは、すみませんでした」

少し落ちついたところで、あたしはタシユア先輩に謝りに行った。ほんとうは行かなくてもいいのかもしれないけれど、それだとあたしの気が済まない。

言われて初めて気がついた。あたしには、ちゃんと両親がいる。

イマドも、先輩たちも、シーモアもナティエスもミルも……両方、あるいは片親がいないのに。

自分がこんなに多くのものを持っていたことに、どうして気づかなかったんだろう？

結局あたしは辛かったことだけを抱えて、そこで泣いていただけだったのだ。

逃れたいといいながら、自分でその手に辛さを抱きしめていた。これで逃れられるわけがない。

この手を、放さなくちゃ。

そうして身軽になつて、歩き出さなくちゃいけない。

怖いけど。不安だけど。でもやらなきゃ……。

いろいろなことが頭をよぎる中、真っ直ぐにタシユア先輩を見る。こんなふうに先輩を見ることができたのは、初めてかもしれない。

「何を謝るのですか？ 何か悪いことでもしたという、意識があるのですか？」

それが先輩の返答だった。

とたんに何を言ったらいいのかわからなくなる。

だめ、考えなくちゃ。

自分が何を言いたいのか、今どうしたいのか、必死に考える。

「ええと、あの、あたし先輩に……」

「ですから、何をしたというのです？」

タシユア先輩って、どうしてこう意地悪なんだろう？ おかげでまたどう言ったらいいのか、分からなくなってしまった。

なかなか適当な言葉が思い浮かばない。

泣きそうになるけど、それはどうにかこらえて、また必死に考える。

「ルーフェイア、いい顔になったな」

「え？」

突然のシルファ先輩の言葉に、驚いた。

「あたしが……？」

信じられない言葉。

困惑してイマドの方へ振り向く。

「俺もそう思う。お前今、いい顔してるぜ」

同じことを言われて、ますます困惑する。

「どう見てもまだ、ヒヨコですがね」

タシユア先輩……怒らない？

そして気が付いた。

もしかしてこれ、みんなあたしのこと、褒めてるんだろうか？

うそ、みたい。

こんな風に正面切って、あたしにいろいろ言ってくれるなんて。



今までそんなことはなかった。「グレイス」という名のせいで、誰もあたしの傍へは来なかったし、普通に扱ってくれる人もいなかった。

それに何もかも、「出来てあたりまえ」にされてたから……。

こんどは、涙をこらえきれなかった。泣いちゃダメだと思っけど、どれほどぬぐっても、あふれてくる。

「ごめんなさい……あたし、やっぱり……」

「ま、そういうのなら、泣いてもいいんじゃないか？」

イマドが笑った。

「わたしも、こういうことなら悪いとは思わないが」  
シルファ先輩もそう言ってくれる。

「やれやれ……泣き虫は相変わらずですね。

あなた1人が、重いものを背負っているわけではありませんよ。

自分だけが悲劇の主人公などと、思いこまないことですね」

「はい」

あたしのことだ。きつとまた泣いてしまっだろうし、座りこんでしまっ時だってあるだろう。

でも、みんないるから。

だからきつと、立ちあがれる。

波が無限の回数、よせては返すように……。

F i n

## あとがき

7作目を最後まで目を通してくださって、ありがとうございます。  
なお明日からは、第8作目「力の行方」の連載を開始します。  
いつもどおり、“夜8時過ぎ”の更新になります。  
感想・評価大歓迎です。一言でも、お気軽にどうぞ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6152e/>

---

立ち上がる意思 ルーフェイア・シリーズ07

2011年2月7日09時11分発行